Abstract

アイルランド文学とフォルモサの邂逅

——「西来庵事件」と菊池寛「暴徒の子」をめぐって

呉佩珍
✉ peichen@nccu.edu.tw

Ireland had been under England's rule since the medieval period. From the late 19th century until the early 20th century, Irish writers like W.B. Yeats, Synge, Lady Gregory and A.E. (George William Russell), and so on adopted from Irish folk tales, folk songs, Gaelic traditions as well as absorbed the customs of the Irish people and the local color to their works. Through popularizing the movement of Gaelic Revival, the consciousness of the Irish nation and the Irish culture was awakening; finally, the Irish won independence from England in 1922. The movement of Gaelic Revival also spread to East Asia, including the related colonial issues such as the subjectivity of the nation and national identity, expansion to the periphery of the Japanese empire, and a colonized Taiwan and Chosun. The main purpose of this project is to explore how the movement of the Gaelic Revival affected Taiwan under Japanese rule and how the Irish experiences inspired the Taiwanese to create their own "Formosa" experiences. Moreover, this project will explore how the imagination of Irish literature crossed over the boundary to encounter Formosa to inspire Taiwan to imagine Taiwan "herself" as well as to create their "own" Formosa ideology.

Keywords Irish literature(アイルランド文学), The Incident of Ta-pa-ni(西来庵事件), Kan Kikuchi(菊池寛), Hentong Lin(林献堂), Chichao Liang(梁啓超)

1 はじめに

12世紀以来、アイルランドは、イギリスによって植民地化され1922年に独立するまで、700年余りもその支配に置かれてきた。19世紀末から20世紀初頭にかけて、ナショナリズムが台頭し、アイルランドの人々の独立への希求が強まっていた。杉山寿美子によると、「1891年に文学運動が、それを継承し、1899年に演劇運動が興され」て、アイリッシュ・ルネッサンスと呼ばれた、「最も輝しい成果、誇らしい遺産」が、アベイ・シアターである[1]。1911年から1912年にかけて、アベイ・カンパニーによるアメリカやロンドン各地の公演で、アイルランド演劇は、インターナショナルな評価を獲得している。そして、1913年以後、アイルランドは労働争議による社会混乱に陥り、独立運動への動きが激しくなり、1922年にアイルランド自由国が誕生するに至る[2]。上記のような時代背景からわかるように、1912年以後の10年間、アベイ・シアターを中心に、アイルランドのナショナルな色彩を濃厚に帯びた演劇運動は、アイルランド独立運動の一環として、アイルランド独立運動に拍車をかけることとなった。と同時に、その演劇運動が独立運動の一環として、そして、アイルランド文学の誇らしい文化遺産として、知られるようになった。そのため、アイルランドとアイルランド文学は、19世紀後半から、「反植民支配」というメッセージを帯びたアイコンとして、表象されていく。実は、日本や当時その植民地支配下の台湾もアイルランド文学や演劇をとおして、その「反植民地支配」の思潮の洗礼を受けていたのである。

本稿の目的は、「西来庵事件」以前、アイルランド経験がどのように台湾に影響を与えたかについて、中国の梁啓超と台湾の林献堂を中心に、探求することにある。また、菊池寛の「暴徒の子」と原作のグレゴリー夫人の「牢獄の門」との比較をとおして、アイルランド文学と「西来庵事件」との関わり、そしてアイルランド経験がどのようにフォルモサ・イデオロギーの萌芽に影響を与えたかについて、探求することも、本稿のもう一つの目的である[3]。

---

1 杉山寿美子『アベイ・シアター1904-2004：アイルランド演劇運動』(東京：研究社，2004)，p.5.

2 上同，pp.8-9.

3 フォルモサは、ポルドガル語の「麗しい」という意味である。世紀の大航海時代に、ポルトガルの水夫が、台湾を経由した際、「Ilha Formosa」と驚嘆したため、のちに西洋の台湾に対する称呼となった。翁佳音「『福爾摩沙』的由來」(中央研究院台湾史研究所檔案舘http://archives.ith.sinica.edu.tw/collections_con.php?no=25)を参照。日本植民地期に台湾の人々が、主体性という問題に目覚め始め、ナショナリズムに近い意識が徐々に形成されていったことに対して、「フォルモサ・イデオロギー」だと指摘されている。Rwei-Ren Wu, *The Formosa ideology: Oriental colonialism and the rise of Taiwanese nationalism, 1895-1945* (Doctoral Dissertation, University of Chicago, 2003)を参照。

2 アイルランド経験とフォルモサ——梁啓超と林献堂を中心に

安東貞美が台湾総督に就任したのち、1915年に台湾南部で大規模な武力蜂起事件が起こった。首謀者の余清芳が、寺廟の「西来庵」で密かに蜂起したのである。蜂起地点にちなんで、この事件は「西来庵事件」と呼ばれている。と同時に、暴動が起こった場所は「タバニ」(現在、台南の玉井)であるため、「タバニ事件」ともいわれている。余清芳は、宗教を利用して、台湾にはすでに「神主」が現れており、「大明慈悲国」を建立し、日本人を駆逐するという噂を流していた。また、賦税を軽減し、参加者には豊かな褒美がもらえると宣伝していた。

警察は1915年に起きたこの武装抗日運動において、密かに蜂起をあおっていたのが余清芳だと察知した。余は指名手配され、山地に逃げ込み、1915年1月から8月にかけて、同志を集めてタバニ付近の派出所を襲撃した。総督府は、軍隊と警察隊を出動させ、山狩りをおこなって余の身柄を確保しようと試み、同年8月22日に余は逮捕された。事件が治まってから、台南の臨時裁判所で審理が行われている。「匪徒刑罰令」(1898年に日本統治に抵抗する「匪徒」を懲罰するため制定された法令)によって、1957名が告発され、1413人が起訴された[4]。最後には、800人ほどに死刑判決が言い渡された。このような杜撰な死刑判決の消息は、早速日本「内地」に伝えられ、物議をかもした。そして、帝国議会において、賛否をめぐり激しい攻防が繰り広げられた。世論のプレッシャーに屈して、台湾総督府は、100数名を処刑したのち、大正天皇の即位という理由から残る「被疑者」たちを恩赦にしたのである[5]。

実は、1915年に起こった「西来庵事件」を分かれ目として、台湾の人びとは、武力抗日から非武力抗争の文化啓蒙運動へ切り替えている。この路線転換は、日本内部に反射されたアイルランド経験を想像、模倣し、みずからの「フォルモサ·イデオロギー」を築き上げようというモチーフによるものであろう。そのきっかけは、「西来庵事件」以前に、遡らなければならない。

「西来庵事件」以前、アイルランド経験はすでに日本統治下における台湾の前途について思索し、焦慮していた知識人にヒントを与えている。林献堂はまさにそのなかの一人である。林献堂は、日本植民地時代において、台湾中部霧峰の名門出身である。武力暴動という抗日手段に反対し、台湾の民族独立運動を導く有名な人物であり、「西来庵事件」以後、蔣渭水とともに台湾議会設置運動を主導していた。林献堂の、アイルランド経験との出会いは、梁啓超に関係している。

1898年に戊戌政変という中国の現代化を図った改革が失敗したため、梁啓超は日本へと亡命し、日本に15年近く滞在した。梁啓超は、台湾が日本の植民地にされたとき、朝

---

4 康豹『染血的山谷—日治時期的噍吧哖事件』(台北：三民書局, 2006)、Paul Katz, *When valley Turned Blood Red: The Ta-pa-ni Incident Colonial Taiwan.*(Hawai'i Press, 2005)を参照。

5 池田敏雄「柳田國男と台湾—西来庵事件をめぐって—」(『日本民族文化とその周辺』, 東京：新日本教育図書, 1980), pp.61-62.

廷に建白書を上奏し、割譲不可と主張した[6]。それは、梁啓超と台湾が出会ったきっけであった。日本に亡命した後の梁啓超の著作は、台湾植民地政府に禁止されていなかなったので、台湾でも入手できた。それで林献堂は、プロパガンダにあふれていた当時台湾のマスメディアに物足りなく感じ、梁啓超の愛読者となっていった[7]。

亡命以後の梁啓超を支援していたのは、おもに犬養毅や大隈重信、板垣退助といった改進党系の政治家である。梁啓超は、1898年12月に横浜で『清議報』(1898年12月~1901年12月)を、そして1902年2月8日に同じく横浜で『新民叢報』(1902年2月8日~1907年11月)を創刊した。「民権主義」、「民族主義」を提唱し、清政府に対抗するため、論陣を張った。『清議報』によって、梁啓超は一躍「維新派」の代表的な論客となった。『新民叢報』の刊行によって梁啓超は、中国の文明史を転換させ、「近代化」した功労者になった。1907年6月には、中国は「君主立憲」という段階に入ろうとして、梁啓超は、東京で「政聞社」を組織し、日本で中国の国会開設を後援しようとした[8]。

1907年に林献堂が初めて日本に渡ったとき、横浜に赴いて梁啓超を訪問しようとしたが、結局果たせなかった。のちに奈良の旅館で偶然に会うことができた。林献堂は、梁啓超に自らの慕う気持ちを伝えたほか、台湾がおかれていた状況について、「政治的差別を受け、経済においては搾取を受け、法律面においても不平等な待遇を受けている。そして最も悲しいのは、愚民教育がおこなわれていること」と、梁啓超に訴えた[9]。それに対して、梁啓超は次のように答えた。「三十年以内に、中国にあなたたちを救う力は絶対につかない。アイルランド人のイギリスへの反抗運動を見習うべきだ。初期のアイランド人のように暴力手段を取れば、その蜂起規模によって警察か軍隊に弾圧され、みな虐殺される運命を免れぬ。のちに、その手段を換え、イギリスの野党と与党に手を回し、やっとその統治側の高圧から解放され、進んで参政権を得て、イギリス人と拮抗し得たのだ。例を挙げてみれば、イギリスの或る漫画家は、二人のアイランド人がそれぞれロープの一端を持ち、イギリス首相を絞殺したと描いた。それは、アイルランド人議員がイギリス議会には人数は多くないけど、二大政党の間には重要な位置を占めていて、イギリス内閣の運命を左右するほどの力を持っていることを意味している。それを見習ったらいかがでしょうか」[10]。

---

6 黄得時「梁任公遊台考」(『台湾文献』1965.9), pp.4-5. 許俊雅「論梁啓超辛亥年遊台湾之影響」(『社会科学』第三期, 2007), p.152.

7 葉栄鐘「林献堂与梁啓超」(『台湾人物群像』, 台中：晨星出版, 2000), p.199.

8 狭間直樹『梁啓超 アジア文明史の転換』(東京：岩波書店, 2016).

9 甘得中「献堂先生與同化会」『林献堂先生記念集』(林献堂先生記念集編纂委員会, 1974.12), p.520. 本文における中文の日本語訳は、筆者による。以下同。原文は下記のとおりである。「我們處異族統治下, 政治受差別, 經濟被榨取, 法律又不平等。最可悲痛者, 由無過於愚民教育。」

10 上同。原文は次のようである。「三十年內, 中國絕無能力可以救援你們, 最好仿效愛爾蘭人之抗英。在初期, 愛人如暴動, 小則以警察, 大則以軍隊, 終被壓殺無一倖存。最後乃變計, 勾結英朝野, 漸得放鬆壓力, 繼而獲得參政權, 也就得以與英人分庭抗禮了。乃舉例說:英國漫畫家繪兩位愛爾蘭人, 以一條繩索各執一端, 將英首相絞殺。這意味著愛人議員在英國席次不多, 但處在兩大黨間, 舉足輕重, 勢固得以左右英內閣之命運。你們何不效之。」

『林献堂記念集』の編纂者、葉栄鐘はこの会見が台湾の社会運動にどのように影響を与えたかについて、次のように述べている。

> 梁任公[11]と林献堂さんとの初対面における談話は、林献堂個人の思想と行動に影響を与えただけでなく、台湾人の政治運動が温和路線に転向させることをも間接的に影響を与えた。当時、日本人の台湾における政治的力と台湾の特殊的な地理環境からすれば、台湾人の政治運動は、流血革命を許されない。たとえ現れたとしても、絶対成功する可能性がない。(中略)私はのちに民国二年(1913)の苗栗事件と民国四年(1915)の礁吧(ロ＋年))事件を見れば、[主導者の]羅福星と余清風は、みな辛亥革命の影響を受け武力抗日に従事した。しかしながら、みな失敗して死に、そして後者は数千人の無実者を巻き込んでいた。その結果の無残さは目を覆いたくなるほどのものである。それによって任公の先見の目と行き届いた思慮がますますあきらかになっている。そのため、先生[林献堂]は、片時も忘れぬ[12]。

上記の引用文からわかるように、林献堂が梁啓超からもらった「アイルランド経験」のアドバイスは、台湾の武力抗日運動から温和な文化啓蒙運動に切り替えた契機の一つになったといえよう。また、林献堂が、梁啓超を訪問した際、梁啓超は国会開設運動に着手し始めていたため、この訪問は偶然ではないかもしれない。1920年に台湾の文化協会が、林献堂、蒋渭水という中心メンバーによって創設されたのち、1921年から1934年までにかけて、15回の台湾議会設置請願運動は、展開された。この議会設置請願運動は、台湾人に参政権を獲得させ、植民地における台湾人の地位と待遇を高めることを目指していた。これは、梁啓超が提議したアイルランドの議会抗争路線と、一致している。

1920年代、台湾民族独立運動においてアイルランド経験への想像力はさらにその力を発揮していた。「西来庵事件」以後、武力抗日は、もはや日本の植民地支配を揺さぶることはできなかった。台湾の民族独立運動路線にも顕著にその変化が見られる。1922年4月に 『台湾』に発表された「台湾議会設置請願書」には、アイルランドの例を引き合いして、日本政府にその主張を訴えている。「1801年愛蘭議会を英国議会に併合せられてより、種々なる不平等待遇を受けし結果、遂に愛蘭選出の議員は愛蘭自治党を要求したが、爾来三十餘年間英愛の難題が思ふ通りに解決し得なかつた。(中略)終に最近愛蘭自由国として完全なる自治植民地の地位を与ふる協定が成立したのである」[13]。

---

11 梁啓超の号。

12 黄得時「梁任公遊台考」(『台湾文献』, 1965.9), p.7. 引用文の日本語訳は、筆者による。原文は下記のとおりである。「梁任公與林獻堂先生初見面一夕話, 不但影響林獻堂個人之思想與行動, 間接亦決定臺人政治運動採取溫和之路線；以當時日人在臺灣政治力量之強大, 與夫臺灣地理之特殊環境而言, 臺人之政治運動, 必不容有流血革命之出現, 即使出現, 亦必無成功之可能[中略]吾人嘗觀其後, 民國二年之苗栗事件, 暨民國四年之礁吧哖事件, 羅福星與余清風, 均受辛亥革命之影響, 而從事武力反抗, 然皆敗死, 而後者又株連無辜且數千人, 後果之慘痛, 令人觸目驚心。益見任公所見之遠與謀事之忠, 無怪先生(林獻堂)未嘗須臾忘懷也。」

13 「台湾議会設置請願書」(『台湾』, 1922.4), p.40.

林献堂ないし台湾の日本帝国に対する抗争路線について、梁啓超のアイルランド経験への注目、そしてそれをふまえた発想は、どこから来たものであろうか。実は、梁は戊戌政変に失敗したのち、日本政府の庇護を受け、1898年8月に日本軍艦大島に搭乗して、日本へ亡命している。同行していた王照の証言によると、その船中、書籍を手元に置いてなかった梁啓超に気晴らしをさせるため、艦長が東海散士『佳人之奇遇』を送った。梁啓超は、読みながら翻訳していて、同年にさっそく『清議報』の創刊号でその漢文訳を発表したと言われている[14]。『清議報』での連載は、『佳人之奇遇』の第12巻まででその後中断をしている。さらに後年、梁啓超が創作した『新中国未来記』は、『佳人奇遇』から影響を受けていた、とすでに指摘されている[15]。亡命した当時、閲読した『佳人之奇遇』が、梁啓超に多大な影響を与え、愛着されていたことがうかがい知れる。1907年に神戸の旅館で林献堂に与えられたアイルランド経験は、おそらく東海散士『佳人之奇遇』から観察し、得られたものであろう。

東海散士が創作した『佳人之奇遇』は、明治初期の政治小説で、1882年から1897年まで、計13年間刊行し続けていた。全編は8篇16巻で、明治期のベストセラーであった[16]。この小説は、主人公の日本人·東海散士が、西洋の二人の佳人、スペインの幽蘭とアイルランドの紅蓮と、フィラデルフィアの独立の鐘で出会い、三人を中心に展開されたものである。この中には、明の遺臣·范卿、そしてポーランドが滅びる歴史を述べていた亡命客、イギリスの侵略によって衰滅したエジプト、イギリスの植民地のインドの惨状、そして朝鮮半島をめぐる植民地統治の論争といった描写も挿入されている。『佳人之奇遇』は、基本的には国家主義と自由民権を基調として、強国による圧迫と侵略のもとに、小国がいかに対抗するかを描くものである。その中にアイルランドに関する描写は、アイルランドの愛国女志士·紅蓮を中心に、主にイギリスに対する抵抗とアイルランドの再興の運動を支援することに焦点を当てて、展開されてゆく[17]。

紅蓮は、散士と出会い、次のようなことを訴えた。アイルランドが英国の暴政に置かれて、貴族と汚職する官吏はアイルランド農民の耕地を強奪するほか、高利貸しによって貧民を搾取する。そのため、毎年、アイルランドには数万の餓死者と路頭に迷う者が出る。紅蓮の父親は、農地を農民に与え、財産を費やして、豪傑と連合し、アイルランドを独立させようと計画し、その機が熟していたところ、情報が漏えいしたため、逮捕されて、獄中で病没した。その後、紅蓮は追放されて、生涯英王の臣民になることはなく、アイルランドの独立をもって英国の虐政に復讐すると誓った。そして、スペインの志士·幽蘭と、もう一人のアイルランドの女志士パネールの妹と姪と密通し、独立運動を支援していた。

---

14 盧守助「梁啓超訳『佳人之奇遇』及びその周辺」(『環日本海研究年報』20, 2013.3), p.1.

15 山田敬三「『新中国未来記』をめぐって――梁啓超における革命と変革の論理――」(『梁啓超――西洋近代思想受容と明治日本――』, 東京：みすず書房, 1999).

16 高井多佳子「『佳人之奇遇』を読む――小説と現実の「時差」――」(『史窓』58巻, 2001.2), p.293.

17 大沼敏男等校注、東海散士『佳人之奇遇』(『政治小説集』二 東京：岩波書店, 2006).

上述のあらすじからわかるように、『佳人之奇遇』におけるアイルランドは、おもにナショナリスム、植民地問題と主権独立などの政治要素によって表象されている。

日本の政治小説は、元来、自由民権運動を宣伝する目的で形成され、政治目的を優先させたジャンルといえよう。のちに梁啓超が、政治改革に高い関心を持ち、文学を手段として、中国の政治と社会を改革しようと図っていたのは、日本の政治小説から強い影響を受けたためといえる。梁啓超は、さらに具体的に日本の明治維新の成功には、政治小説が肝心な役割を果たしたと指摘してもいる。「日本の維新の運に大功労を有するのは、小説もその一つである。明治十五、六年のあいだ、民権自由の声が国中に充満し、翻訳が盛んになり、政治小説の著述も始まる。最も有効に国民の脳裏に浸透したのは、『経国美談』と『佳人之奇遇』であろう」[18]。

上述からわかるように、梁啓超の『佳人之奇遇』に対する評価はきわめて高い。この小説を最初に中国に紹介しただけでなく、この小説は、日本滞在中の梁啓超にとって、その思想展開の出発点ともいえよう。アイルランドの独立は、当時植民地台湾には多大な励ましとなっていた。「台湾議会設置運動」の主導者の一人、林献堂は、まさにアイルランド経験を想像し、それを台湾の民族独立運動へと連結させようとした。もちろん、「台湾議会設置運動」に伴う文化啓蒙運動が、「民族想像」を構築させ、「フォルモサ・イデオロギー」を築き上げるには、不可欠のプロセスである。

また、『佳人之奇遇』を介して、梁啓超が、アイルランド経験への想像を台湾に伝えただけでなく、それは1920年代の台湾の民族運動路線にも決定的な影響を与えた。また、「フォルモサ・イデオロギー」が萌芽し始めた契機ともなった。同時代の日本文学思潮の洗礼を受けながら、その中から吸収しさらに台湾の政治運動にその経験を伝承した。

3 触媒としての「西来庵事件」と植民地経験への想像—菊池寛の「暴徒の子」とグレゴリー夫人の「牢獄の門」

1916年2月に菊池寛が発表した「暴徒の子」は、「牢獄の門」のアイルランド植民地経験をふまえて、台湾の植民地経験を想像し、それを描こうと試みた作品である。その創作のきっかけは、1915年7月に台湾で起こった「西来庵事件」という武力蜂起事件である。

菊池寛の「暴徒の子」は、1916年2月に『新思潮』創刊号に発表された戯曲である。この戯曲が掲載された同号の「編集後に」には、同人の久米正雄が次のような添え書きをつけている。「草田[19]から原稿と一緒に来た手紙に、彼の戯曲が武者小路氏の『或る相談』から

18 梁啓超「飲氷室自由書」『清議報』(第26号, 1899). 原文は下記のとおりである。「於日本維新之運有大功者, 小説亦其一端也。明治十五六年間, 民權自由之聲, 遍滿國中……翻譯既盛, 而政治小説之著述亦漸起(中略)而其浸潤於國民腦質, 最有效力者, 則≪經國美談≫、≪佳人之奇遇≫兩書為最。」

19 菊池寛は、かつて菊池比呂志、草田杜太郎などの筆名を使っていた。「暴徒の子」には、草田杜太郎を使用

ヒントを得たやうに思はれるのは避けたい処だと云つて来た。一言書き添へて置く」[20]。

では、武者小路実篤の「或る相談」は、一体どのような作品であろうか。なぜ、菊池はわざわざそれから「ヒントを得たやうに思はれるのは避けたい」と断わったのか。

武者小路実篤の「或る相談」は1916年1月の『中央公論』に発表されたものである。その内容は、甲、乙、丙という三人の会話によって構成され、冒頭は「昔、ある国で人の生命に就て次ぎのやうに相談会があつた。三人とも絶えず煙草をのむ」[21](p.247)から始まる。三人は誰かを死刑にすべきか否かについて次のように話し合っている。「之が同国人だと厄介だが、土人相手だから簡単だ」(p.248)、あるいは「罪名の同じものは一たばに決めてしまう方がいいでしやう。どうせ土人だから誰もやかましくは云はないでせう」(p.250)、「時さへあれば謀反しやうとする奴ばかりだからね。無理もない処もある。何しろ亡国の民になつてはたまらない」(pp.250-251)。この内容は、明らかに1915年7月に、日本の植民地·台湾南部で起こった大規模な武力抗日事件、「西来庵(＝噍吧(口＋年))事件」を意識して、その後、軽率な逮捕と判決を皮肉ったものである。

「西来庵事件」をめぐる鎮圧と判決に対して、最初に詰問、抗議したのは、武者小路実篤である。この事件について、執筆した短文、評論ないし戯曲は、1915年11月号『白樺』の「六号雑記」、評論「八百人の死刑」「編集室報告」、そして1916年1月の『中央公論』に掲載された「ある相談」である[22]。「ある相談」が発表された翌月に、さっそく菊池寛の「暴徒の子」が1916年2月の『新思潮』に掲載された。菊池寛のこの作品は、武者小路実篤に啓発されたものだと考えられよう。菊池寛の「暴徒の子」は、武者小路実篤と同じように、日本の植民地台湾で起こったこの蜂起事件に対する即時的な反応だといえる。1915年7月に台湾南部に起こった「西来庵事件」について、事件以後の『朝日新聞』を検索すると、その相関報道は二十件も達していた。この事実からわかるように、「西来庵事件」は、当時、日本「内地」においても注目度の高い事件だったことがうかがいしれる。

「暴徒の子」の冒頭におけるその時間と場所の設定は「ある国の新領土に本国人の焼打虐殺が行われてから間のない頃。惨事のあつた村の内の一つ」とされている。このような描写は、やはり、当時の帝国議会でも喧騒していた日本植民地台湾で起きた「西来庵事件」と簡単に連想することができるであろう。では「暴徒の子」は、一体何を描いたものであろうか。

菊池寛が第四次『新思潮』に参加した当初、寄稿したものは、ほとんどが戯曲である。これらの作品はアイルランド戯曲から少なからぬ影響を受けていた[23]。菊池寛の「半自述伝」によると、1913年9月に京都帝国大学英文選科に入学してから、1916年に卒

している。

20 「編集後に」(『新思潮』, 1916.2).

21 武者小路実篤「或る相談」『中央公論』(1916.1).

22 武者小路実篤の「西来庵事件」をめぐる論述について、紅野敏郎「武者小路実篤——八百人の死刑をめぐって——」松村定孝等編『日本近代文学における中国像』(有斐閣, 1975)を参照。

23 河野賢司「菊池寛とアイルランド演劇」(『エール』第17号, 1997.2), pp.46-47.

業するまでアイルランド劇の研究にひとすら没頭し、その卒業論文は「英国及び愛蘭の近代劇」であったことからわかるように、アイルランド演劇より相当に強い影響を受けていた。さらに、「暴徒の子」は、アベイ・シアター(Abbey Theatre)で活躍していた劇作家、またアイルランド演劇の母といわれるグレゴリー夫人(Lady Gregory)の「牢獄の門(The Gaol Gate)」(1906年)から影響を受けていると指摘されている[24]。

菊池寛の「暴徒の子」について、その先行研究では、主に次のように指摘されている。片山宏行はこの作品が、グレゴリー夫人の「牢獄の門」からの影響をうけており、両作の人物設定やモチーフには高い相似性があると指摘する。また、「暴徒の子」には、〈マント事件〉に「対する菊池の苦悩が投影」されており、おそらく『牢獄の門』を読んだ菊池には、仲間の罪を白状せずに葬り去られたデニス・カヘルの姿と、佐野文夫の窃盗の罪を告げずに一高退学になった自分自身の姿とが二重写しになって見えたはずである」[25]と述べている。それに対して、格清久美子は「現実のテーマにした『牢獄の門』や『ある相談』を読んだ作者が実際に台湾で起こった事件に触発されて創作した作品と考えるのが自然ではないか」と、異なる意見を示している[26]。さらに金牡蘭は、「『ある相談』から菊池寛の発話は『暴徒の子』のオリジナリティが危うくなることに対する不安だけではなく、『暴徒の子』における植民地が、『ある相談』や『八百人の死刑』を経由する形で、台湾の事件を具体的に指示してしまうことへの不安を表している」とのべている[27]。

台湾の植民地支配と「西来庵事件」という歴史事実から検証した際に、三者の論点は、やはり再考する余地があるだろう。モチーフの影響について、片山の論点は、同時期、植民地で実際に起こった事件という影響を看過したきらいがある。とはいえ、格清が「暴徒の子」を「先住民族の抵抗というテーマ」ととらえ、「アイルランド戯曲のテーマとして立ち上がってくる植民地民衆の民族意識や独立への希求を当時の社会主義者以上に的確に見抜いた」という評価も、植民地を一枚岩的に表象している傾向が見られる。また、「暴徒の子」における、台湾内部のエスニック・グループに関する描写からみれば、菊池寛は、「原住民(＝ちいほあん)」(p.23)、と「漢民族(＝土人)」ときちんと区別しているので、おそらく「西来庵事件」という漢民族による最後の大規模の武力抗日事件を、「先住民族の抵抗」とはとらえていないであろう。

そして、金牡蘭の場合、「「暴徒の子」のオリジナリティが危うくなることに対する不安だけではなく台湾の事件を具体的に指示してしまうことへの不安を表している」という指摘は、「西来庵事件」における日本マスメディアの注目度と認知度を過小評価しているきらいがある。『朝日新聞』を例としてみれば、蜂起が発生以後、1915年7月19日「台湾

24 片山宏行『菊池寛の航跡－初期文学精神の展開』(大阪：和泉書院，1997)，pp.213-218.

25 上同。

26 格清久美子「菊池寛とアイルランド文学――『暴徒の子』における植民地の表象をめぐって――」(『近代文学研究』第17号，2000.2)，p.23.

27 金牡蘭「「暴徒の子」が物語るもの――菊池寛とアイルランド文学の思考に向けて――」(『比較文学』第49号，2006)，p.43.

独立の陰謀暴徒蜂起して警官六名内地人五名を惨殺す」という報道から、同年10月28日まで、合計17件の報道があった。1916年2月に『新潮』で発表されたのち、書評においても「台湾の暴徒の子と、その母とその妻とを描いてゐる、母が一ばん活躍してゐる。大体に於て平凡な作だが、人を動かすの[ママ]熱はある。」[28]と述べられており、同時代において、菊池寛の「暴徒の子」の舞台を「台湾」として受け取っていたことがわかる。

つぎに菊池寛の「暴徒の子」とグレゴリー夫人の「牢獄の門」2作を1回、読み返し、分析を行えば、それぞれのモチーフの異同は、もっと明らかになるだろう。

菊池寛の「暴徒の子」のあらすじは、以下のようになっている。登場人物は、主人公の寿春は17、8の少年で、その妻(18、9の少女)とその母(60に余る凋びた老女)とある男である。ある村で、「本国人」による暴動が起こり、何もしていないにもかかわらず、親思いの寿春は、放火して怪我をした父親を心配して、後についていったところ、一緒に「あの国の人」に逮捕され、投獄されてしまう。また、「本国人」の人たちは、誰も暴動の実情を白状しないので、「向こふでも手の付け方がないだろう」(p.23)と考えていた。役人は村人がやったことを白状したら、無罪のあなたを釈放する、と寿春に告げる。最初、寿春は承知しなかったが、瀕死の父親が水を乞い苦しんでいる様子を見かねて、「世界中の人を裏切つても水を上げたくなってしま」い(p.30)、そして白状してしまう。水を飲んだの父親が亡くなり、寿春は釈放される。寿春が白状したことが、村人たちに知られてしまい、自宅に尋ねてきた男に連れ去られ、「河の中に沈めにかけるのだらう」と。描かれている。

この描写からわかるように、「新領地」の村人たちは、起こした暴動に対して、それぞれの立場からとるように描かれている。寿春の父親は、「兄弟二人とも絞り殺されて居るんだから」、焼き討ち暴動に参加しても無理はないといわれる。しかし、寿春は、「何も知らないし、あの国の人を少しも憎んで居ないし、郵便局の人達にも可愛がられていた」(24)ので、母親は彼が殺されたらとても不憫だと考えている。また、母親は、寿春が釈放される前後で、その態度が明らかに変化しているのである。寿春の妻は、彼が白状しなければ、無事で居られるであろうと言ったところ、母親は、死んだ兄から聞いた話を引き合いに出して、次のようなことを言った。「あの国の人達は罪があらうがあるまいがハツキリ分からなくつても罰さへハツキリ与へればいいのだつて。土人があの人達を殺したときには懲しめの為に誰かを殺しさへすればいいのだつて」(p.23)。しかしながら、寿春が釈放されたと聞いたと同時に、「あの国の人達」に対する態度が次のように完全に変わってしまう。「あの国の人達は村の人達よりも十倍もかしこいよ。寿春が何もしないことをちゃんと神様のやうに見通しているのだよ。だからわしは村の人のやうにあの国の人を憎いとは思はないだよ。あんな悧巧な人達にわし達が治められるのは之は当たり前といふものだよ」(p.26)。

暴動事件をめぐる被植民地者のさまざまな反応を通して、まさに植民地政策がこの植

28 青頭巾「読んだもの」(『新潮』15巻4号, 1916.4).

民地においてどのように働いているのかが明らかになってきている。兄弟が殺害されたため、その暴動に参加する必然性を持っている父親、植民地者への反抗意識を持っていない寿春、そして植民地統治に徐々に慣れていくような母親という三者の表象は、おそらく日本の「新領土」になってすでに20年経っていた台湾人民と植民地政権との関係のある側面を示している。依然として植民地政権に対して反抗的態度を取る父親は「西来庵事件」の反逆者のイコンである。また植民地政権が君臨した以後の世代を代表するのは、寿春である。そのため、「何も知らない」、「あの国の人をも少しも憎んでいない」のである。最後、すでに植民地政権に飼いならされたているのは、母親であろう。その残酷な一面を知っているにもかかわらず、すでにその支配下に置かれることに慣れているのである。このような構造は、最後の結末にもはっきり見て取れる。

寿春が白状して無罪釈放されたことを知られ、村人のある男が彼を連れ去りにきたとき、寿春は自分が殺されることを知りながらも、みずから押入れから出てきた。母親の老女は死に物狂いで、「寿春を殺すのなら殺して見ろ。町の役人に頼んで此の村の奴を皆殺しにしてやるから」(p.32)というのに対して、男は、「彼奴等は土人が彼奴等を殺したら大騒ぎをしやがるが、土人同士の事はどうなつたつてお介意なしよ」(p.33)と言い残して、寿春を連れ去る。老女は憤り植民地者の手を借りて復讐すると誓い、「畜生！一番おとなしい者を一番ひどい目に合はせやがつて！村の奴も町の奴もくたばつてしまひやがれ！」(p.33)とののしるのであった。

「暴徒の子」に描かれているのは、植民地政権がもたらす被植民地者内部の分裂と対立という構図である。この構図からは、植民地側の統治が着々と安定期に入っていることを解読しうると同時に、被植民地者が行う反抗には一種「敗北」の無力感と虚無感にあふれていることがわかる。そのため、植民地者対被植民地者との関係において、「被植民地者」は、徹底的な敗者として表象されるほかはない。

それに対して、「暴徒の子」に影響を与え、イギリスの暴政によって迫害を受けたことを描くグレゴリー夫人の「牢獄の門」は、どのように被植民地者を描いたのであろうか。かつて、菊池寛と山本修二との共著のなかで「牢獄の門」を次のように評価している。「この劇はどうも実感が、悲劇美にまで高められてゐないので、徒らに惨憺たる気分ばかりがあつて、傑作とはいはれない」[29]。

「暴徒の子」と比べると、たしかに「牢獄の門」における被植民地者の感情や憤怒は、「アイリッシュ・ナショナリズム」に完全に回収されてしまう傾向がある。そのため、人物の内部描写は平面的に流れてしまう。登場人物は、母のマリー・カヘル(Mary Cahel)とデニズの妻、マリー・クシン(Mary Cushin)と牢獄の門番がいる。あらすじは、次のようなものである。デニズ・カヘルが住んでいる村にはある役人が襲撃され、デニズ・カヘルはその中の一人の容疑者として、他の人と一緒に逮捕された。まもなくその母と妻が手紙を受けとって、彼が釈放されるのではないかと考える。なぜかというと、その村中には

29 菊池寛・山本修二『英国・愛蘭近代劇精髄』(東京：新潮社，1925). p.212.

デニズがみなを裏切ったことで釈放されることができたという噂が流れていたからだ。結局、牢獄の門前に来ている門番から、彼がすでに絞首され死んでしまったことがわかる。また、彼は何も白状しなかっただけでなく、「足跡一つ」という証拠で仲間のなかで処刑されたただの一人となった。その母親は、彼が裏切ることなく、処刑されたことに誇りを持ち、最後に「五〇年をとおして、私は杖に頼るほど腰が曲がっても、彼を讃えることに倦まない。マリー･クシン、おいで。道沿いを叫ぶのよ！デニズ･カヘルは隣人たちのために死んだ！」[30]というせりふをもって、結末となる。

「牢獄の門」が、最初に日本に紹介されたのは、『新思潮』によるものである。それは、第一次『新思潮』の同人、小山内薫がイギリス新聞The Stageに掲載された「牢獄の門」の1907年6月10日からの上演情報を次のように紹介したものである[31]。「この劇は、凄惨な愛蘭式の悲劇で、力もあり、恐ろしくもあり、観客の注意を捉へる事に於て確に成功した。この劇は愛蘭に於て屢々起こつた事実の忠実なる描写である」[32]。「牢獄の門」におけるいわゆる「愛蘭に於て屢々起こつた事実の忠実なる描写」は、実際に1879年アイルランド小作人による「土地同盟」が土地所有者に対抗し、勃発した「土地戦争」(Land War, 1879~1882)を指す。「一九世紀末から二〇世紀初頭のアイルランドの農村社会は、大土地所有者と小作人の間のトラブルが続発、銃を絡んだ事件も稀ではなかった」。ゴレゴリー夫人のこの作品は、「密告者を裏切り者と見做すアイルランドの風土が生んだ悲劇」とされている[33]。そのため、「牢獄の門」は、プロパガンダ的な要素が色濃く、「ナショナリズム」を喚起するためのイデオロギーにあふれている。しかしながら、作者グレゴリー夫人は「牢獄の門」が自ら遭遇した愛蘭農民に起こった三つの本当の出来事に基づいたもので、「この巻においてもっとも好きな作品の一つで、一字も変えたことはない」[34]と明言している。かつて「アイルランドに尊厳を与えるために書く(to give dignity to Ireland)」[35]と言ったグレゴリー夫人がこの戯曲を愛してやまない原因は、イギリスに植民地化され苦しんでいるアイルランド農民を実写したことで、その「アイルランド民族主義」を創造し、構築できたからだと思われる。

「暴徒の子」が発表されたのち、菊池寛がいかにこの作品を重要視していたかは、1919年『心の王国』[36]と1922年『日本近代戯曲集』とともに収録されたことから、うかがい

---

30 Elizabeth Coxhead ed. “The Gaol Gate,”*Lady Gregory: Selected Plays*, 105. 日本語訳は筆者による。以下同。原文は下記のとおりです。”I too stoop a stick through half a hundred years, I will never be tired with praising! Come hither, Mary Cushin, till we’ll shout it thorough the roads, Denis Cahel died for his neighbors!”

31 小山内薫「倫敦における愛蘭劇」(『新思潮』, 1907.10).

32 上同, p.48.

33 杉山寿美子『アベイ・シアター 1904－2004 アイルランド演劇運動』(東京：研究社, 2004), pp.150-151.

34 注30に同じ, p.106. “I like it better than any in the volume, and I have never changed a word of it.”

35 呉潜誠「愛爾蘭啓示録」(『航向愛爾蘭』, 立緒出版社, 1999), p.37.

36 菊池寛『心の王国』(東京：新潮社, 1919). 小説以外、戯曲には『屋上の狂人』、『父帰る』、『海の勇者』と『暴徒の子』が収録されている。跋は芥川龍之介による。

知れる。「暴徒の子」は、1922年5月に「裏切り」と題を改めて、歌舞伎役者の中村歌右衛門一座によって新富座で上演された[37]。菊池寛本人から、「台湾」にちなんでいる作品とは明言されてはいないが、同時代の読者には「西来庵事件」の下敷きする戯曲としてみられていたことが、次にあげる時代評から明かになっている。「読んだもの」には、「草田森太郎『暴徒の子』は脚本である。台湾の暴徒の子と、その母とその妻とを描いてゐる、母が一ばん活躍してゐる(下線筆者)」とのべられている[38]。また「五月の芝居『孤城落月』と『裏切』(下)」には、「日本領となつてまだ間の無い台湾のある土人の家の内部を表はした舞台、灰色の壁とうす暗い魚油のともされた、この室内の空気に何となく陰惨な気のただよはされて居る(下線筆者)」と書かれている[39]。上述からわかるように、「暴徒の子」が「西来庵事件」に基づく戯曲として捉えられていることは、当時の読者(あるいは戯曲の観客)にとって、一種の暗黙の了解であったといえよう。とはいえ、なぜ菊池寛は、「暴徒の子」は「『或る相談』からヒントを得たやうに思はれるのは避けたい」と明言したのであろうか[40]。

「暴徒の子」が創作されたきっかけは、『新潮』創刊号に送った最初の作品、戯曲の「藤十郎の恋」が却下されたためである。それは、芥川龍之介、久米正雄などの同人たちの読み合わせ会による結論であった。「藤十郎の恋」の不採用通知をうけて、短い期間に趣向が全く異なる「暴徒の子」を書きあげることが可能であったのは、台湾に起こった「西来庵事件」がイギリスの植民地統治下のアイルランド人による蜂起を彷彿とさせるからであろう。そのため、ゴレゴリー夫人の「牢獄の門」から翻案したのである。また、武者小路実篤の「ある相談」よりヒントを得たと思われることを避けたいのと考えるのは、単なる「西来庵事件」を描いただけでなく、植民地統治に置かれた人々の状況のある普遍性をとらえた自負からであろう。

菊池寛は、「牢獄の門」のアイルランド植民地経験をふまえて、西来庵事件を介して「暴徒の子」を台湾の植民地経験に書き換えようと試みた。植民地側の官僚を諷刺した一方、植民者の彼が、植民地化される側が起こした反逆事件を描くとき、一種のアンビバラントな筆触で作中人物を造形し、被植民地者の重層性を浮き彫りにしようとした。しかしながら、菊池寛がアイルランド経験を援用し、描いて、そして想像したフォルモサ植民地経験は、実際に起こった同時代の植民地の実況とはかけ離れている。なぜかといえば、現実における「西来庵事件」で蜂起した者が渇望していたものを、菊池寛は見落としているからである。それはまさに「牢獄の門」にみられる一種の民族的想像で、グレゴリー夫人が喚起しようとした「ナショナリズム」と同質なものである。それは、一種の「フォルモサ·イデオロギー」といえよう。

---

37 「五月の芝居『孤城落月』と『裏切』」(下)(『読売新聞』, 1922.5.10).

38 草田杜太郎は、菊池寛の筆名。青頭巾「読んだもの」(『新潮』15券4号, 1916).

39 注37に同じ。

40 片山宏行『菊池寛のうしろ影』(東京：方英社, 2000), p.12.

4 おわりに

19世紀末、アイルランドは、すでにイギリスによって700年余りも統治されてきた。この時期に、アイルランド民族独立運動は徐々に勃興し、アイルランド文学復興運動を推進することによって、アイルランド意識とアイルランド民族の文化意識を喚起し、アイルランドが独立することを目標としていた。そして1922年にアイルランドはその独立を実現した。1904年にW.B.イエーツ(W.B.Yeats)、グレゴリー夫人(Lady Gregory)、そしてジョン・シング(John Synge)などアイルランド出身の知識人によって創立したアベイ・シアター(Abbey Theatre)は、アイルランド演劇運動を推進したと同時にアイルランド文学にルネサンスをもたらし、アイルランドの民族独立運動や、国家が独立することに大きく貢献し、アイルランド的想像力の構築にも働きかけた[41]。このアイルランド経験は、さまざまな面において、日本と台湾にも多大な影響を与えた。同時期において、特にアイルランドと同じように植民地化されていた台湾は、文化、文学という非武力の手段を通して、ケルト民族の共同想像を凝結させ、1922年に独立に成功したアイルランド経験を渇望していたといえよう。

1916年2月に菊池寛が発表した「暴徒の子」は、「牢獄の門」を通して、アイルランド演劇を受容しながら、台湾の植民地経験を想像し、それを描こうと試みた。その創作のきっかけは、1915年7月に台湾で起こった「西来庵事件」という武力蜂起事件である。1920年代、台湾民族独立運動においてアイルランド経験への想像のメカニズムは、さらにその力を発揮していた。「西来庵事件」以後、武力抗日は、もはや日本の植民地支配を揺さぶることができなかった。台湾の民族独立運動路線にもその変化が顕著に見られる。「西来庵事件」以後、台湾の政治運動は武力闘争から離れて、台湾議会設置運動に転向していく。その変化の背後には、東アジアにおけるアイルランド演劇の伝播、そして、それによる日本近代文学の受容思潮の影響が潜んでいる。これまでに想像されてきた日本近代文学の枠組みは、このような植民地台湾における受容様態からすれば、やはり再考せざるを得いといえよう。

41 呉潛誠「愛爾蘭啓示録」(『航向愛爾蘭』, 台湾：立緒出版社, 1999), pp.2-48.

参考文献

青頭巾(1916)「読んだもの」『新潮』第24券第4号, pp.34-35 Aozuki(1916) Yonda Mono, *Shincho*, 24(4), 34-35.

狭間直樹(2016)『梁啓超 アジア文明史の転換』, 東京：岩波書店. Hazama, Naoki(2016) *Ryo Keicho Ajia Bunmeishi no Tenkan*, Tokyo：Iwanamishoten.

菊池寛(1919)『心の王国』東京：新潮社. Kikuchi, Kan(1919) Kokoro no Okoku. Tokyo：Shinchosha.

菊池寛・山本修二(1925)『英国･愛蘭近代劇精髄』, 東京：新潮社. Kikuchi, Kan・Yamamoto, Shuji(1925) *Eikoku・Airan Kindaigeki Seizui*, Tokyo：Shinchosha.

紅野敏郎(1975)「武者小路実篤――八百人の死刑をめぐって――」松村定孝等編『日本近代文学における中国像』, 東京：有斐閣. Kono, Toshiro(1975) Mushanokoji Saneatsu：Happyakunin no Shikei wo Megutte, *Nihonkindai Bungaku ni Okeru Chugokuzo*, ed. Matsumura, Sadataka, Tokyo：Yuhikaku.

池田敏雄(1980)「柳田國男と台湾――西来庵事件をめぐって――」『日本民族文化とその周辺』東京：新日本教育図書, pp.451-495. Katayama, Hiroyuki(1997) Ikeda, Toshio(1980) Yanagida Kunio to Taiwan：Seraian jiken wo megutte, *Nihominzokubunka to Sono Shuhen*, Tokyo：Shinnihon Kyoikutosho, 451-495.

片山宏行(1997)『菊池寛の航跡－初期文学精神の展開』, 東京：和泉書院. Katayama, Hiroyuki(1997) *Kikuchi Kan no Koseki：Shokibungakuseishin no Tenkai*, Tokyo：Izumishoin.

河野賢司(1997)「菊池寛とアイルランド演劇」『エール』第17号, pp.43-56. Kono, Kenji(1997) Kikuchi, Kan to Airurando to Engeki,' *Eru* Vol.17, 43-56

金牡蘭(2006)「「暴徒の子」が物語るもの――菊池寛とアイルランド文学の思考に向けて――」『比較文学』第49号, pp.35-51. Kim, Moran (2006) Botono Koga Monogataru Mono：Kikuchi, Kan to Airurandobungaku no Shiko ni Mukete, *Hikakubungaku* Vol.49, 35-51.

片山宏行(2000)『菊池寛のうしろ影』, 東京：方英社. Katayama, Hiroyuki(2000) *Kikuchi, Kan no Ushiro Kage*, Tokyo：Hoeisha.

格清久美子(2000)「菊池寛とアイルランド文学－『暴徒の子』における植民地の表象をめぐって－」『近代文学研究』第17号, pp.22-35. Kakusei, Kumiko(2002) Kikuchi, Kan to Airurando Bungaku：Boto no Ko ni Okeru Shokuminchi no Hyosho wo Megutte, *Kindaibungaku kenkyu* Vol.17, 22-35.

武者小路実篤(1916)「或る相談」『中央公論』Mushanokoji, Saneatsu(1916) Aru Sodan, *Chuokoron*.

小山内薫(1907)「倫敦における愛蘭劇」『新思潮』, pp.41-55. Osanai, Kaoru(1907) Rondon ni Okeru Airangeki, *Shinshicho*, 41-55.

大沼敏男等(2006) 東海散士『佳人之奇遇』, 東京：岩波書店. Onuma, Toshio(2006) *Tokaisanshi Kajin no Kigu*, Tokyo：Iwanamishoten.

盧守助(2013)「『佳人之奇遇』及びその周辺(梁啓超訳)」『環日本海研究年報』第20号, pp.1-28. Ro, shujo(2013) Ryo Keicho Yaku Kajin no Kigu Oyobi Sono Shuhen, *Kan nihonkai kenkyu nenpo* Vol.20, 1-28.

新思潮同人(1916)「編集後に」『新思潮』. Shinsicho Dojin(1916) Henshugo ni, *Shinshicho*.

杉山寿美子(2004)『アベイ・シアター 1904－2004 アイルランド演劇運動』, 東京：研究社. Sugiyama, Sumiko (2004) *Abe Shiata 1904-2004 Airurando Engekiundo*, Tokyo：Kekyusha.

高井多佳子(2001)「『佳人之奇遇』を読む―小説と現実の「時差」」『史窓』第58号, pp.293-306. Takai, Takako(2001). Kajinno Kigu wo Yomu：Shosetsuto Genjitsu no Jisa, *Shiso* Vol.58, 293-306.

山田敬三(1999)「『新中国未来記』をめぐって――梁啓超における革命と変革の論理――」狭間直樹編『梁啓超－西洋近代思想受容と明治日本』, 東京：みすず書房. Yamada, Keizo(1999) Shinchugoku Miraiki wo Megutte：Ryo Keicho ni Okeru Kakumei to Henkakuno Ronri. ed. Hazama, Naoki, *Ryo Keicho：Seiyokindaishiso no Juyo to Meijinihon*, Tokyo：Misuzushobo.

読売新聞「五月の芝居『孤城落月』と『裏切』(下)」『読売新聞』.1922.5.10. Gogatsu no Shibai Kojorakugetu to Uragiri (ge) *Yomiuri Shinbun*. 1922.5.10.

Coxhead, Elizabeth(1972) ed. The Gaol Gate, *Lady Gregory：Selected Plays*, Canada：Maclean-Hunter Press.

Katz, Paul(2005) *When valley Turned Blood Red : The Ta-pa-ni Incident Colonial Taiwan*, United States : Hawai'i Press.
甘得中(1974)「献堂先生與同化会」『林献堂先生記念集』, 台北：林献堂先生記念集編纂委員会, pp.511-544. Gan, De-zhong(1974) Hen-tong Xiansheng yu Tonhuahui, *Lin Hen-tong Xiansheng Jinianji*, Taipei : Lin Hen-tong Xiansheng Jinianji Bianzuan Weiyuanhui, 511-544.
黄得時(1965)「梁任公遊台考」『台湾文献』, pp.1-68. Huang, De-shi(1965) Liang Rengong Yutaikao, *Taiwan wenxian*, 1-68.
呉潜誠(1999)『航向愛爾蘭』, 台北：立緒出版社. Wu, Qian-cheng(1999) *Hangxiang Aierlan*, Taipei : Lixu chubanshe.
康豹(2006)『染血的山谷—日治時期的噍吧哖事件』, 台北：三民書局. Kang, Bao(2006) *Ranxie de shangu : Rizhishiqi de Bajiaonian Shijian*, Taipei : Shanminshu.
梁啓超(1899)「飲氷室自由書」『清議報』(第二十六冊), pp.1-106. Liang, Chi-chao(1890) Inbinshi Jiyushu, *Qingyibao* Vol.26. 1-106.
台湾雑誌社編集員(1922)z「台湾議会設置請願に就て」『台湾』第三年第一号, pp.29-41, Taiwan zazhishe(1922) Taiwan yihui shezi qingyuanshu, *Taiwan*(3)1, 29-41.
許俊雅(2007)「論梁啓超辛亥年遊台湾之影響」『社会科学』三, pp.152-163. Xu, Jin-ya(2007) Run Liang Chi-chao xinhainian yu Taiwan zhi Yinxiang, *Shehuikexue* Vol.3, 152-163.
葉栄鐘(2000)「林献堂与梁啓超」『台湾人物群像』, 台北：晨星出版, pp.199-203. Ye, Ron-zong(2000) Lin Hen-tong yu Liang Chi-chao, *Taiwan Renwu Qunxiang*, Taipei : Chenxingshuju, 199-203.
周宛窈(2016)『台湾歴史図説』, 台北：聯経出版. Zhou, Wan-yao(2016) *Taiwan lishi Tushuo*, Taipei : Lianjing chuban.

呉佩珍 Peichen WU

(台湾)立政治大学台湾文学研究所准教授。日本明治・大正女性文学、日台植民地期比較文学・文化。『真杉靜枝與殖民地台灣』(台北：聯經出版, 2013), 井上隆史編『津島佑子の世界』(東京：水声社, 2017), 「饒正太郎—台湾詩人と日本モダニズム詩運動」和田博文等編『〈異郷〉としての日本：東アジア留学生が見た近代』(東京：勉誠出版, 2017)、"The Peripheral Body of Empire : Shakespearean Adaptations and Taiwan's Geopolitics, "Re-Playing Shakespeare in Asia.(Poonam Trivedi ed., New York : Routledge, 2010)など。翻訳書にFaye Yuan Kleeman著『帝國的太陽下：日本的台灣及南方殖民地文學』(*UnderanImperial Sun* : Japanese Colonial Literature of Taiwan and the South)(台北：麦田出版社, 2010)、柄谷行人著『日本近代文學的起源』(日本近代文学の起源)(台北：麦田出版社, 2017)など。